

重度知的障害者と関わるホームヘルパーの経験

—現象学的アプローチによる『見守り』ができるようになる』経験の記述と分析を通して—

○ 北星学園大学大学院 久野 真知子 (8581)

キーワード：重度知的障害者、ホームヘルパーの経験、現象学的アプローチ

1. 研究目的

重度の知的障害があり、明確な言葉で語ることの無い人たちがいる。そのような彼らの生活に関わるホームヘルパーは、彼らの手の動き、その時々表情など、小さなサインを察知できるよう気を配り、訴えに応じていく。このような「重度知的障害者」と関わるホームヘルパーたちの経験は、例えば実務経験のあるヘルパーが新人ヘルパーに関わり方を伝えようとする時、「見てればわかるよ」としか言い表せないような、言語化することの困難な経験である。それは、人称的関係性のもとで育まれた「実践知」とも呼べるものであり、『純粹』に論理的に『洞察的』でありうるような類のものではない(榊原 2012: 26)。また、日々の生活の営みは、一人ひとり異なり、固有の意味体験であるため、その生活を支える方法も定型化された方法論や手順として一般化することはできない。

本研究の目的は、ホームヘルパーが「重度知的障害者」との関わりをどのように経験しているのか、ホームヘルパーBさんの語りの記述と分析を通して、その経験の成り立ちを明らかにし、支援関係の内実の一端を捉えることである。

2. 研究の視点および方法

私たちの経験の「意味」に着目し、意味経験の成り立ちを明らかにしようとする哲学が「現象学」であり、近年、この現象学的方法を用いた研究が看護領域などで蓄積されつつある。筆者は、この現象学の知見や方法を用いた現象学的アプローチによって、重度知的障害者と関わるホームヘルパーの経験を捉えることができるのではないかと考える。

調査方法は、同行訪問による参与観察とインタビューである。まず、本研究に同意の得られた、A 居宅介護事業所に勤めるホームヘルパーBさんの語りの文脈を理解するため、利用者Yさんのサービス提供場面に同行(2014年6月20日)し、その後、2014年7月14日(40分)、8月19日(3時間)にインタビューを実施した。インタビューは、あらかじめ質問項目を定めない自由な対話式のインタビューを採用した。得られたインタビューデータは逐語録におこし、それを熟読することによって、全体の雰囲気や流れを捉えた。そして、主語・述語に注意し、文脈を辿りながら経験を記述した。語りの中の要素を見出し、要素と要素の関係やその背景を捉えるよう留意した。また、現象学的アプローチにおける分析の信頼性を高めるため、「臨床実践の現象学研究会」への参加、発表(2014.12.6)を実施している。ヘルパーBさんに対しては、2015年3月にフィードバックし、記述内容と経験が一致しているかどうか確認している。本大会では、ヘルパーBさんの経験の一部を報告する。

3. 倫理的配慮

氏名、事業所名に関しては無作為のアルファベットを使用した。インタビューの録音と録音記録は、研究以外の目的で使用することはない旨、口頭と文書にて説明し同意を得た。また、サービス提供の場への筆者の同行については利用者家族の同意を得ている。

4. 研究結果

重度の知的障害がある利用者 Y さん（以下 Y さん）と 10 年余り関わってきたホームヘルパー B さん（以下 B さん）の語りを記述、分析した結果、その一つに『見守り』ができるようになる経験」が明らかとなった。

B さんにとって見守りとは、最初から見守るつもりで距離を置くのではない。B さんが Y さんに「近づいて」、Y さんの「僕を一人にしてくださいオーラ」を受け止めてから離れている。見守りは「一人にしてほしい」という Y さんの訴えを受け止めた B さんの応答なのである。

B さんは、このような「見守り」という関わりは、「あの人サボっているんじゃないか」と思われるかもしれないと語る。「あの人」という語りから、B さんと Y さんのことを知らない人、ヘルパーの仕事を知らない人など、自分たちと関わりのない人から見たら、自分の姿は「さぼっている」ように映るのではないかと B さんは感じている。しかし B さんは「手を出すのは簡単」だと言う。それは、「しない（手を出さない）」ということが、決して消極的ではない、重要な一つの関わりのある様であることを表わしている。

また、B さんが「今私たちできるから」と語っているように、見守りは、最初からできるのではなく、時間をかけて「できるようになる」ことなのである。言葉を話さない Y さんとの関わりは、Y さんからの具体的な発信を待つことに留まらず、ヘルパーが「ちゃんと見て」、「気づいて」いくことが重要になる。それは、見ているだけでなく、ちゃんと見ているという、Y さんへの一つの積極的な関与の仕方であるように思われる。例えば、Y さんが「横になる」、「眠そう」な姿に、B さんは気が付く。そしてこの「気づき」の背景には、B さんが Y さんとの時間を重ねる中で分かるようになった、Y さんの「いつも」、「普段」や、「具合悪い」、「体調悪い」時の姿がある。さらに B さんは「(Y さんは) 具合悪いとか、体調悪いとか、けっこう横に・・・なるんですね、自分でね」と、Y さんの主体的な姿も捉えている。B さんは、Y さんが「今日随分横になる」ことや、眠そうな様子に 대응するように、それを必ず頭に入れておき、必要に応じて熱を計ったり、「もしかしたら発作くるかも」と、予測をたてて備えながらそこに居るのだ。

5. 考察

「見守り」は、直接的な介入ではなく、ヘルパーが備えて待つような状況である。しかし、B さんの「待っているあいだ」には、Y さんを「ちゃんと見て」、「気づく」能動的な姿を捉えることができた。それは、B さんが「しない（手を出さない）」ことと、「能動（見る、気づく）」を同時に経験しているということだ。「見守り」という、ヘルパーの介助行為としては、一見何もしていないように見える状況の中に、Y さんと関わりあう B さんの能動的な経験を捉えることができた。

また、B さんは Y さんとの関わりを積み重ねる中で、Y さんの「普段」や「いつも」が分かるようになり、このような過去の経験に支えられて未来を先取りし、「今」の具体的な行為へと促されている。言葉を話さない Y さんを「見守る」ことは、時間をかけて「できるようになる」時間性を帯びた経験であり、B さんと Y さんが 10 年という時間を重ねてきた経験の厚みを捉えることができた。

インタビューデータ及びその分析・考察の詳細は、本大会当日報告する。

<文献>

- ・ 榊原哲也 (2012) 「ケアの志向性：フッサーからのアプローチ」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集』(31) 18-37